# おてら

## 常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会

## 写経会
毎月第二・四金曜日
午後一時より

# 春彼岸法要会

先祖への供養は
私への供養

三月十七日～二十三日

三月二十日（金・祝）
午前十一時より
彼岸中日法要
護持会総会

ご本尊様にお参りしてから
お墓参りをしましょう

## 伴走

住職　蒲原霊英

雛祭りには祖父が亡くなって一周忌となり、その九日後には祖母の白寿の誕生日がやって来ます。二人はいとこ同士で、祖父の母である私の曾祖母と祖母は、本願寺八代・蓮如上人の開基でその八男蓮芸が初代住職となった、西宮市名塩にある教行寺から嫁して来ました。室町時代に八十五歳まで生きられた蓮如上人、もっと遡れば、鎌倉時代に九十歳まで生きられた親鸞聖人の長命の血が、二人にも流れているから長命なのでしょうか。とは言え、不慮の事故で亡くなることもあるし、戦争だってあったのだから、やはりいただいて来た命としか言いようがないと思うのです。「生きる縁あれば生き、死ぬる縁あれば死ぬ」、生きることも死ぬことも、すべて阿弥陀様のおはからいでいただいた「ご縁」なのだと思います。

こういう時、一般的に皆さんは「運命」という言葉を使われるかもしれません。「運命」と「ご縁」、何が違うのでしょうか。

私は物事を考える時、よく絵や映像を思い浮かべるのですが、「運命」の場合は私が一人で歩いている感じがし、阿弥陀様のおはからいでいただいた「ご縁」の場合は、歩いている私に阿弥陀様が伴走してくださっている感じがします。私の人生は誰に代わってもらうこともできず、山あり谷ありの人生を、―独生独死独去独来― 結局はたった一人で歩んでいかなければなりません。その時に、私の来し方行く末をすべて分かった上で、一緒に歩んでくださる方が居られるだけで心強いものです。加えて、どんな時でも私を見護りながら、「大丈夫、これで良いのだよ」と声を掛けてくださるなんて、何とありがたいことか。ところが、特に深い谷底で足掻いている時ほど、その温かい眼差しが見えず、ありがたいお声も聞こえないのが愚かな私です。誰しも、だいぶ時間が経ってから、「ああ、あの時のあのこと（ほとんどが自分にとっては良くないこと）には、そういう意味があったのか」と腑に落ちる瞬間が必ずあるはずです。これがすなわち、その時の阿弥陀様の眼差しが見え、お声が聞こえた瞬間です。そのおはからいに気付かされた時、時間は掛かったものの、いただいたご縁に心から感謝の気持ちが起こって来るのではないでしょうか。これが南無阿弥陀仏のお念仏です。

本当は時間差なく、常に阿弥陀様の眼差しを感じつつお声を聞かせていただきながら、このご縁に感謝してお念仏を称えさせていただきたいものです。ところが困ったもので、私にだけ良いことだけが起こるように先導してもらいたいなんて思ってしまう、欲たかりな私も居たりします。合掌

# 御正忌報恩講

宗祖親鸞聖人のご遺徳を偲び、聖人が伝えてくださった阿弥陀如来の智慧と慈悲のお心を、改めて深く味わわせていただく御正忌報恩講法要が、本山で一月九日から聖人の御祥月御命日である十六日まで勤修されました。

八日間十四座、聖人の御真影（木像）がご安置されている御影堂は、参拝者の熱気にあふれ、お念仏の声が響き渡りました。

御影堂内陣の両余間には、聖人のご生涯を描いた八幅のご絵伝を奉懸。九日午後二時の逮夜法要の前に、ご門主が御真影をご安置するお厨子の扉を開かれる「御親開扉」が行われることから、御正忌報恩講法要が始まりました。

期間中は、連日の法要・儀式や説教に加え、国宝・鴻の間でのお斎の接待、特別講演、公開講座、本山成人式や各種展示等の多彩な催しも行われ、延べ約一万八千人の参拝者で賑わいました。

御正忌報恩講法要では、全国から出仕した讃嘆衆が鳳笙、篳篥、龍笛、太鼓等の雅楽を奏でます。

## 御正忌報恩講　ご門主法話（ご親教）

大谷 光淳　門主

本年もようこそ御正忌報恩講法要にご参拝くださいました。（中略）

さて、今年の元日に地上波で、「西本願寺―伝統と葛藤」というテレビ番組が放送されました。ご覧になった方もいらっしゃるかと思いますが、過疎や高齢化が進む中、これまで通りにみ教えを伝えていくことが難しくなっている浄土真宗本願寺派の現状や、その取り組みなどが紹介されていました。もちろん、時代の変化に合わせてさまざまな取り組みを進める上で、最も大切なことは「現代を生きる私たちにとっても、真実信心を頂き、浄土真宗のみ教えが生きる依りどころとなる」ということに変わりはありません。

仏教を説かれたお釈迦様は、私たちの人生の本質を「苦しみ」であると示されました。具体的には「生・老・病・死」の四苦、さらに「怨憎会苦」などを加えた「四苦八苦」として表されています。そして、ここで言われる「苦しみ」とは、「自分の思い通りにならないこと」ということです。私たちは人生において、憂いや悩み、悲しみなど、自分の力ではどうすることもできない出来事を経験しなければなりません。

人生の根本的な悩みや苦しみ、その「苦悩を除く法」が仏法です。お釈迦様は、「苦しみ」の根本的な原因は、無常であるこの世界を「常なるもの」と受け止め、無我であるものを「我である」と執着することにあると示されました。物事を自分の思い通りにしか捉えられず、悩み苦しむのが私たち「煩悩具足の凡夫」であり、それは阿弥陀如来の光に照らされて明らかとなる私自身の本当の姿です。

阿弥陀如来は、このように煩悩に縛られて苦悩する私たちを救おうと、常にはたらき続けてくださっており、その温かいお慈悲の心は一人ひとりに分け隔てなく注がれています。阿弥陀如来のおはたらきに出遇うとき、私たちは他の人々もまた、私と同じく阿弥陀如来から等しく願われた命であることを知らされます。そして、すべての人びとの幸せを願われる阿弥陀如来のお心をいただいたなら、そのお心にかなうよう、お互いに敬い合い、助け合って生きるという、これまでとは違った新しい生き方が生まれてくるのではないでしょうか。

これからも阿弥陀如来のおはたらきを聞かせていただき、共々に日々の生活を送らせていただきましょう。本日はようこそご参拝くださいました。合掌